

第5班

『汽水の生活環境史』 共同研究

(1) 共同研究員名

研究代表者：安室知

共同研究員：川島秀一

研究協力者：常光徹 山本志乃 松田睦彦

(2) 研究目的

日本列島の場合、大河川の河口部や潟湖・内湖といった沿岸環境の多くは淡水と海水が入り交じる汽水域となる。そこは、従来、低湿なため人が暮らしにくい不毛の地、新田開発などにより克服されるべき悪地として位置づけられてきた。しかし、そうした評価はおもに為政者の側からなされたものにすぎない。また為政者のために残された記録や統計に頼る歴史研究の視点もそれにならうものであったことは言うまでもない。

しかし、現実にはそうした地にも人が暮らし、またいっけん悪条件だからこそ独特の民俗文化が形成されてきた。たとえば、淡水魚とともに海水魚が棲息する汽水域ではその生産性の高さを利用する独特な漁撈技術が発達するし、また水の制御がままならないからこそ、それに順応したかたちで特殊化した低湿地農耕がみられた。さらに、そこは海から河川へまたその反対の荷の積み替えがおこなわれるなど水上交通の要地ともなっており、歴史的には市や宿屋の登場といった都市化への胎動ともとれる現象がみられた。

本共同研究では、汽水域独特の文化要素を繋ぎ合わせ、日本列島の生活環境史として総合化することで、生活者の視点にたった汽水像を描き、「汽水文化」を提唱することを目的としたい。また、その過程において、非文字資料研究の方法として、生活環境史の手法を開拓することも併せて研究の目的とする。

(3) 活動経過

〈2014年度〉

(1) 合同調査

調査地：十三湖周辺地域（青森県）

訪問先：中泊町博物館、弘前市立博物館、太宰治記念館「斜陽館」

調査日：2014年8月7-9日

参加者：安室・常光・川島・山本・松田

(2) 研究会

• 第1回

日時：2014年12月12日午後

場所：横須賀市自然・人文博物館

参加者：安室・常光・川島・山本・松田

• 第2回

日時：2015年3月10日午後

場所：神奈川大学

参加者：安室・常光・川島・山本・松田

(3) 個別調査

• 山本：2015年2月10-12日（三重県松坂市・津市）、3月21-22日（宮崎県宮崎市・日向市・門川町）

• 常光：2015年2月20-24日（高知県高知市・中土佐町）

• 安室：2015年3月5-6日（福岡県柳川市）

• 川島：2015年3月21-22日（静岡県浜松市、三重県松坂市・津市）

• 松田：2015年3月23-25日（佐賀県佐賀市・鹿島市）

〈2015年度〉

(1) 合同調査

調査地：南紀沿岸地域（和歌山県）

訪問先：近畿大学水産研究所大島実験場、太地町立くじらの博物館、南方熊楠記念館

調査日：2015年8月28-30日

参加者：安室・常光・川島・山本・松田

(2) 研究会

• 第1回

日時：2015年12月17日午後

場所：國學院大學

参加者：安室・常光・川島・山本・松田

• 第2回

日時：2016年3月28日午後

場所：神奈川大学

参加者：安室・常光・川島・山本・松田

(3) 個別調査

• 常光：2016年2月20-24日（高知県高知市・南国市）

• 川島：2016年3月7-8日（和歌山県那智勝浦町）

• 山本：2016年3月10-14日（青森県八戸市・宮城県岩沼市）

• 安室：2016年3月17-20日（徳島県徳島市・香川県高松市）

〈2016 年度〉

(1) 合同調査

調査地：北上川河口域（宮城県）

訪問先：大崎市田尻地区公民館、熊谷産業ほか

調査日：2016 年 8 月 2-4 日

参加者：安室・常光・川島・山本・松田

(2) 研究会

日時：2016 年 10 月 10 日午後

場所：神奈川大学

参加者：安室・常光・川島・山本・松田

(3) 個別調査

- 松田：2016 年 9 月 7-10 日（愛媛県越智郡上島町魚島・香川県観音寺市伊吹島）
- 常光：2016 年 9 月 9-13 日（高知県高知市・東洋町・安田町）
- 川島：2016 年 11 月 16-18 日（三重県熊野市）
- 安室：2016 年 12 月 15-18 日（鹿児島県鹿児島市・熊本県熊本市）
- 山本：2017 年 2 月 23-26 日（高知市・東洋町）

(4) 研究成果

〈調査概要〉

1. 2014 年度合同調査では、津軽地方（北奥地域）における生活文化、および十三湖周辺の汽水文化について民俗学的な調査をおこなった。十三湖では、とくに汽水域でのシジミ漁について聞き取り調査をおこない、また漁業の実際を見学し写真等で記録した。
2. 2015 年度合同調査では、紀伊半島の生活文化と漁撈文化について民俗学的な調査をおこなった。とくに太田川下流域においてはシロウオ漁について聞き取り調査をおこない、また大島（串本町）の近畿大学水産研究所ではクロマグロの養殖について実験施設を見学するとともに、その技術について調査をおこなった。
3. 2016 年度合同調査では、北上川河口域の生活文化と漁撈文化について現地を車にて巡検した。また、北上川河口域に発達するヨシ原の利用、シロウオの漁撈、および汽水域の造船技術について、ヨシ業者・シロウオ漁師・船大工にそれぞれ聞き取り調査をおこなった。

〈成果物〉

- 安室知 「ホリのある暮らし——柳川（福岡県）の調査より——」、ニューズレター『非文字資料研究』35 号、p 14-17、(2016.1.31)
 - 川島秀一 「籤で決める漁場」、Bulian Giovanni・中野泰編『日本の小規模漁業——環境・社会文化的な視点から（仮題）』、2017 年（出版予定）
- このほか、個人調査については、共同研究メンバー各自が来年度に出版予定の共同研究報告書にお

いて、論文として成果公開する予定である。

なお、同メンバーでおこなった共同研究「水辺の生活環境史」（2011-2013 年度）でも「汽水域」を中心課題にしており、その時の成果はすでに『年報 非文字資料研究』10 号（2014. 3. 20）において、共同研究メンバーそれぞれが論文・研究ノートを投稿している。

（5） 今後の課題と展望（自己点検・評価）

2017 年度中に本共同研究の成果として共同研究報告書を刊行する。共同研究メンバーがそれぞれ個別論文を執筆するとともに、3 年間の共同調査における聞き取り資料を報告する。

この共同研究報告書をもって、当初研究目的に掲げた「汽水文化」を究明することは十分にはできなかったとはいえないが、これまであまり注目されることのなかった内湾や河口域・潟湖といった鹹水と淡水が入り交じる水域における生活文化や生業技術を「汽水域」の民俗文化として包括する視点を示し、かつその具体相をさまざまに明らかにした点は評価できると考えている。

わずか 3 年間の調査研究（共同研究「水辺の生活環境史」〈2011-2013 年度〉と合わせても 6 年間）ではあったが、そうした問題意識を民俗学分野において醸成することができたことは大きな意味があり、今後は何らかのかたちで歴史学や文化人類学・地理学・水産学といった他分野との協業を進め、文理融合の学際的な研究をおこなう必要性を感じている。